

モモ新品種 ‘ひめっこ’

三宅正則・新谷勝広・竹腰 優・雨宮秀仁・佐藤明子¹・手塚誉裕・猪股雅人・富田 晃

¹ 現 山梨県農政部農業技術課

キーワード：モモ，新品種，極早生，ひめっこ

緒 言

山梨県におけるモモの栽培面積は 3,520 ha¹⁾，収穫量は 49,500 t と、ともに全国一の規模を誇り、極早生品種から晩生品種まで栽培されている。極早生品種としては、‘ちよひめ’が最も多く、2010 年の栽培面積は 63 ha²⁾と推定されている。極早生品種は、一般的に甘味や肉質などの品質が中生品種と比較して劣る傾向がある。また、収穫期が梅雨期に当たるため、曇雨天により糖度が低下しやすく、果実品質が安定しない。しかし、早い時期ほど高値で取引される傾向があるため、生産者からは、より食味が良好で栽培性に優れる早生の新品種の開発が求められている。

近年開発されたモモの新品種としては、独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所（以下、果樹研究所）において、‘ひめこなつ’³⁾が品種登録されている。‘ひめこなつ’は満開後約 60 日で成熟する黄肉品種である。また、福島県では、満開後約 60 日で成熟する白肉品種‘はつおとめ’⁴⁾を品種登録している。

山梨県においても早生のオリジナル品種の開

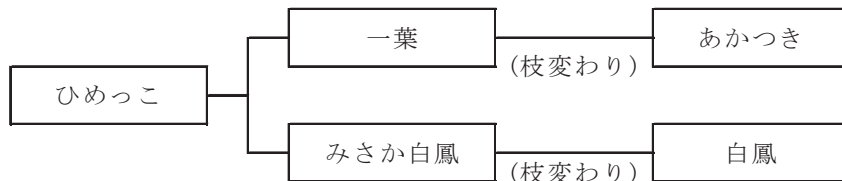
発が求められていたが、‘ちよひめ’より数日早く成熟し、着色と食味がよい極早生の白肉品種‘ひめっこ’を育成したので、育成経過および特性の概要を報告する。

育成経過

本品種は生食用白肉モモの主力早生品種である‘日川白鳳’より前に収穫でき、果実品質が優れ、無袋栽培可能な極早生品種の育成を目標とした交雑で得られた実生から選抜された。

種子親の‘一葉’は果樹研究所（旧果樹試験場）が育成した中生の主力品種‘あかつき’の枝変わりである。‘一葉’には栽培性と肉質が優れる特徴がある。花粉親の‘みさか白鳳’は‘白鳳’の枝変わりであり、早生で食味が良好である（第 1 図）。

1999 年に両品種を交雑し、2000 年に‘11-26’の個体番号を付け、圃場に定植した。2002 年に初結実し、2007 年には小玉であるが糖度が高く、食味が優れているので一次選抜し、‘モモ山梨 11 号’と系統番号を付けた。



第 1 図 モモ ‘ひめっこ’ の系統図

極早生としては高糖度で食味が優れており、農政関係者や関係農業団体による検討の結果、その優秀性が認められ、2010年12月16日付けで品種登録の申請を行った。2011年3月8日付けで出願公表(第25,457号)され、2012年に‘ひめっこ’として品種登録(登録番号第1,346号)された。品種名の由来は、早生で比較的小玉であることをかわいらしいお姫様にたとえたものである。育成担当者(担当期間):櫻井健雄(1999~2002),手塚誉裕(1999~2002),雨宮秀仁(1999~2008),飯島光夫(1999~2002, 2007~2010),富田 晃(2003),竹下政春(2003~2006),猪股雅人(2004~2006),佐藤明子(2004~2009),三宅正則(2007~2010),新谷勝広(2009~2010)。

特性の概要

2002年から2011年までの10年間,‘ひめっこ’の樹体特性および果実形質を原木および2008年に切り接ぎにより作成した複製樹を用いて調査した。‘ちよひめ’と‘日川白鳳’を対照品種とした。‘ちよひめ’は1995年に,‘日川白鳳’は2000年に芽接ぎにより増殖した樹で調査を行った。

1. 樹体特性

樹体特性に関する調査結果を第1表に示した。樹姿は対照品種と同様に斜上であり,樹勢も対照品種と同様に中と評価された(第2図)。新梢の発生は多く,節間長は中,葉の色は緑である。蜜腺の形は対照品種と同様に腎臓形である。花芽の着き方は複である。花は普通咲きで,花冠の表面の

色は淡桃,花弁の形は狭楕円形,花弁の大きさは中である。育成地での満開期は4月6日で‘ちよひめ’より2日遅く,‘日川白鳳’より1日早い。花粉を有し,自家結実性で,生理落果は少ない。育成地(山梨市江曾原:標高440m)における収穫期は6月中旬から下旬,満開から収穫までの日数では76日であり,‘ちよひめ’より4日程度,‘日川白鳳’より9日程度前となる。せん孔細菌病,灰星病には罹病性であるが,通常の薬剤防除により病害はほとんど発生しない。

2. 果実特性

果実の調査結果を第2表,第3表に,結実状況を第3図に示した。果実重は175g前後で,‘ちよひめ’より70g,‘日川白鳳’より80g程度小さい。果形は,‘ちよひめ’,‘日川白鳳’の円形に対し,扁円形で区別性が認められた。果頂部は深く,狭く凹む。果形の特徴(第4図)として,対称で縫合線はやや弱く,梗あ幅はやや広い。果皮の地色は緑白,着色はぼかし状で着色面積はやや大である。果肉は‘ちよひめ’,‘日川白鳳’が乳白色であるのに対し,緑白色でやや青みが掛かっている。果肉の着色は‘ちよひめ’が中,‘日川白鳳’が少であるのに対し,‘ひめっこ’は果皮直下,果肉および核周囲のアントシアニン着色は無または弱で,ほとんど着色しない。肉質は溶質で,果肉繊維が少なく,果汁が多い。対照品種の‘ちよひめ’,‘日川白鳳’より良好である。甘味は極早生品種としては多く,果汁の糖度は12.6°Brixで,‘ちよひめ’,‘日川白鳳’よりやや高い。pHは4.9程度となり,酸味は‘ちよひめ’,‘日川白鳳’より少ない。若干の渋味を呈することがある。

第1表 ‘ひめっこ’の樹体特性

品種名	樹姿	樹の 大きさ	樹勢	花芽の 付き方	がく筒 内側の色	花冠の表 面の色	花弁の 形	花粉の 有無	蜜腺 の形	満開期	収穫 始め期	成熟 日数
ひめっこ	斜上	中	中	複	緑黄	淡桃	広楕円 形	有	腎臓形	4/7	6/22	76
ちよひめ	斜上	中	中	複	緑黄	淡桃	広楕円 形	有	腎臓形	4/5	6/26	82
日川白鳳	斜上	中	中	複	緑黄	淡桃	広楕円 形	有	腎臓形	4/8	7/1	84



第2図 'ひめっこ' の樹姿



第3図 'ひめっこ' の着果状況



第4図 'ひめっこ' の果実



第5図 核の比較
左から 'ひめっこ' 'ちよひめ' '日川白鳳'

第2表 'ひめっこ' の果実特性

品種名	果実の形	果頂部の形	梗あいの深さ	果実の地色	着色の型	果皮の付着性	果肉色	核の大きさ	核の横面の形
ひめっこ	扁円形	深狭凹	中	緑白	ぼかし状	弱	緑白	中	円形
ちよひめ	円形	深狭凹	中	乳白	斑状	弱	乳白	中	短楕円形
日川白鳳	円形	深狭凹	やや深	緑白	ぼかし状	弱	乳白	中	短楕円形

第3表 ‘ひめっこ’ の果実品質

品種名	調査樹齡 (年)	果実重 (g)	硬度 (kg)	糖度 (° Brix)	酸度 (pH)
ひめっこ	8~12	175.5	2.1	12.6	4.9
ちよひめ	12~13	245.0	2.5	11.8	4.7
日川白鳳	7~11	256.9	2.2	12.2	4.3

数値は2007~2011年までの5カ年の平均値である
‘ちよひめ’ は2007~2008年のみ

核は粘核で大きさは中である。核の形は円形で‘ちよひめ’や‘日川白鳳’の短楕円形と区別性が認められた(第5図)。核割れの発生は多である。

3. 栽培上の留意点

‘ちよひめ’の前に収穫できる食味の良い極早生品種として県内の早場産地から遅場産地まで栽培可能である。着色がよく、無袋栽培が可能である。花芽の着生が多く花粉も有しているため結実良好であるが、果実が小さいため、摘蕾から摘果までの着果調節を適期に実施することで果実肥大を促進する必要がある。また、果頂部の軟化や果肉障害の発生が認められることがあるため、硬度を重視した適期収穫に努める。

4. 収穫期は育成地(山梨市江曾原)において、6月中下旬で、‘ちよひめ’より4日程度、‘日川白鳳’より9日程早い。
5. 果実は果形が扁円形で、175 g 前後と小さいが、糖度が12.6° Brix と極早生品種としては高く、酸度も低いことから食味はよい。
6. 着色がよく、無袋栽培が可能であるが、果実が小さいため、着果調節により果実肥大を促進する必要がある。
7. 山梨県内においては、‘ちよひめ’の前に収穫できる食味の良い極早生品種として期待できる。

引用文献

摘 要

1. ‘ひめっこ’は、1999年に‘一葉’に‘みさか白鳳’を交雑して育成した品種である。
2. 小玉であるが糖度が高く、食味が優れていたことから、2007年に一次選抜を行い、‘モモ山梨11号’と系統番号を付けた。2010年に極早生としては高糖度で食味が優れ、優秀性が認められ、品種登録の申請を行い、2012年‘ひめっこ’として登録(登録番号第1,346号)された。
3. 樹姿は斜上で樹勢は中である。開花期は‘日川白鳳’より1日早く、花粉を有する。結実は容易で生理落果は少ない。

- 1) 農林水産省. (2012) 第87次農林水産省統計表
- 2) 農林水産省生産局園芸作物課. (2011) 平成22年産特産果樹動態調査
- 3) 末貞佑子・山口正己・土師 岳・八重垣英明・京谷英壽・西村幸一・鈴木勝征・三宅正則・中村ゆり・小園照雄・木原武士・福田博之・内田誠. (2012) モモの新品種‘ひめこなつ’. 果樹研報. 13: 7-15.
- 4) 小野勇治・岡田初彦・佐藤 守. (2001) 極早生モモ新品種‘はつおとめ’, ‘ふくおとめ’の特性. 園学雑. 708(別2). 220.

New Peach Cultivar ‘Himekko’

Masanori MIYAKE, Katsuhiro SHINYA, Yu TAKEKOSHI, Hidehito AMEMIYA,
Akiko SATO¹, Takahiro TEZUKA, Masato INOMATA and Akira TOMITA

Yamanashi Fruit Tree Experiment Station, 1204 Ezohara, Yamanashi-shi, 405-0043, Japan

Current address:

¹Yamanashi Agricultural Department, Marunouchi, Kofu, Japan

Summary

‘Himekko’ resulted from a cross of ‘Ichiyo’ and ‘Misakahakuho’ made in 1999. Since it is high in sugar content and quality despite of its smallness, ‘Himekko’ has named as ‘Momo Yamanashi 11’ after the primary selection in 2007. Application for the cultivar registration has held in 2010 since its excellence in sugar content and quality was recognized despite of extremely early cultivar, and therefore it was registered as cultivar, ‘Himekko (registration No.1,346)’ in 2012. The harvest is in the middle to the last of June at raising point ;an altitude of 440 m, and is about four days earlier than ‘Chiyohime ’and nine days earlier than ‘Hikawahakuho’. The shape of fruit is oblate that is small as weighted around 175 g, however high sugar content as 12.6 ° Brix despite of extremely early cultivar and low content of acidity made the consequences of good quality. It has good coloration and is possible to grow without paper bagging, however the size is so small that need to advance fruit enlargement by thinning